〈女性作家〉という職業

－明治20年代の場合－

菅　聡子

はじめに

明治20年代は、日本近代文学の成立期にあたる。『小説神髄』『浮雲』の登場を先鞭として、紅葉・露伴、若き森鴎外、北村透谷等、のちの近代文学の展開の基盤をなす作家たちが続々と登場した。そのような時代の空気は、同時に多くの女性作家たちに文壇進出の機会を与えた。自ら〈ものを書くこと〉すなわち〈語ること〉を選択した女性たちに、時代はどのようなまなざしをそそいだのだろうか。

明治二十年代におけるいわゆる〈文学の成立〉を支えていたのは、出版機構の発展・確立であった。出版ジャーナリズムが経済場としての力学を獲得していく過程は、同時に〈作家〉という職業を成立させることになる。そのなかにあって、女性作家へのまなざしは、男性作家に向けられるそれとは自ずから異質なものであった。以上のような問題意識に立って、時代の言説を追いながら、女性作家に向けられた視線の意味を考察することを本発表の目的としたが、とくに今回は明治20年代の女性作家のうちでも、樋口一葉に焦点を絞った。なぜなら、一葉は明治27年末から29年にかけて『にごりえ』『たけくらべ』等の近代文学史上に残る傑作の数々を発表し、それらは同時代においてすでに高い評価を受け、一躍時の人となった、言い換えれば同時代において最も商品価値の高い女性作家であったと同時に、それらの時代のまなざしに対して、彼女自身がどのような思いを抱いていたのかということが、その日記の叙述を通して明らかにできるからである。

なお、本発表の内容は、「流通する〈閨秀作家〉―明治20年代の場合」として「国文学　解釈と教材の研究」（学燈社、平成11・11）に掲載される予定である。よって、ここでは簡単な資料の紹介にとどめておく。

1　女性作家の肖像写真をめぐって

明治28年12月に「文芸倶楽部」の増刊号として「閨秀小説」という女性作家の特集号が刊行された。この「閨秀小説」号をきっかけに、翌29年にかけて女性作家ブームが起こる。この「閨秀小説」号で世間の話題をさらったのは、その巻頭ページに掲載された女性作家たちの肖像写真であった。以下、この肖像写真をめぐる同時代の言説を示す。

・巻頭七文士の肖像は、初めて盛容に接して、益々其才を慕はしむるの感あり。三秀才の筆蹟、六女史の画、いづれも感嘆に堪へざるの思ひあり。（中略）就中評者の尤も驚くに堪へたるものは、稲舟女史が『しろばら』なり。（中略）彼巻頭の肖像中に見えたるが如き、芳紀十六七の処女にしてなほこの才ありと思へば、豈に何ぞ驚かざるを得んや。　（「閨秀小説」「女学雑誌」明治28・12）

・第十二編は臨時増刊たる閨秀小説と称せられたるものなり、流石は当世女流作家の腕揃なれハ孰れを梅孰れを桜とも評すべきにあらず、否唯々勿体なき計りなりかし、況んや巻頭の御肖像御手蹟を拝見してははや現つとなりし批評家殿も多き様なり、併し諸君余り写真に信用を置き給ふな、何故

といはれよ写真師に賄賂といふ世話はなけれど此写真は一葉女史を除くの外は孰れも何年前の写真か判らず、中には御生の子をさへ抱かれたるもありしと聞けば

（「文芸倶楽部」「智徳会雑誌」明治29・1）

・開巻第一尤も吾人の心目を驚かせるは各女学士連の写真なりとす、楊肥趙痩一様にあらざれど其鼻隆く眼差するどく口の締りたる抔一見して其非凡の女丈夫なるを知るべく（中略）若盛りは誠に斯やありけむと思はれぬ（中略）此に一寸可笑は写真の補景中に嘴の長大なる鳥二羽（一は鷺なるべし）を写出せる事是なり這は女子の長舌を戒むと云ふ謎にやあらむ

（在秋保温泉迂鉛「閨秀小説を読む」「奥羽日日新聞」明治29・1・8）

・第八しろばらは巻中第一の美人（但し写真に就て云ふのみ実物は未だ拝見せざれば知らず）田沢稲舟女史の作なり　（在秋保「閨秀小説を読む・続」「奥羽日日新聞」明治29・1・9）

・作者田沢稲舟といへるは近ごろ美妙斎主人の妻になりぬと聞く。巻に出でたる厚化粧の肖像を見るもの、あの顔にてこれをばよもと云はざるものなかるべし　（「白ばら」「めさまし草」明治29・1）

・其名からして誘ふ水あらばいなんと思ふ多情風流を連想させる稲舟女史（中略）の「白ばら」を読んで一たび其痴話口説の材料豊富なのに驚き開巻第一に挿める写真を見て二たび其婀娜たる姿の裸体の胡蝶にも優れるを喜んだ山田美妙が去年遥々出羽三界まで杖を曳き才子佳人目出度く結婚の約整つたは僅かに三両月の前であつた　（「美妙と稲舟」「中央新聞」明治29・3・5）

以上のような言説から、同時代の関心がどこにあるのかは明白である。女性作家たちのイメージは、肖像写真という現実の複製の形で流通し、読者の所有の欲望をかきたてる。いわば女性作家自らが一つの商品として流通し始めるわけである。ここで比較のために男性作家の肖像写真についてふれておく。博文館発行の「少年文集」（明治29・5）の巻頭には「文壇五名士」として饗庭篁村・森鷗外・坪内逍遙・幸田露伴・尾崎紅葉の肖像写真が掲載されている。これには以下の説明文がつけられている。

・題して文壇五名士と云ふと雖、吾人が敢て文士中より五大家と撰定したりと云ふにはあらず、只当時の文壇知名の士の中五氏を読者諸氏に紹介したるのみ、其人の著書を読んで其人を敬慕するもの、これが風采に接するを願ふは、人情の自然なり、諸士の肖像に対し、而して其人の著書に向はゝ、猶諸士に接して其談話を聞くかどけん、左に此五名士の小伝を掲ぐべし。

（「文壇五名士（本号口絵参照）」「少年文集」明治29・5）

ここで問題にされているのは、彼らの作品に対する理解そのものであり、また予告通り、これ以降文壇五名士一人一人の小伝が連載されている。このような扱いと、女性作家の肖像写真をめぐる言説との間には、かなりの落差があると言える。すなわち、彼女たちは〈作家〉という職業にたずさわっていたのではない。彼女たちはあくまで〈女性作家〉、同時代の言葉で言えば〈閨秀作家〉という職業にたずさわっていたのであり、徐々に作品のみ成らず彼女たち自身が出版メディアのなかを商品として流通し始めたのである。

2 樋口一葉の自己認識

このような時代のまなざしを、当の女性作家自身はどのように受け止めていたのだろうか。以下、樋口一葉の日記の記述を示す。

・我れを訪ふ人十人に九人までハたゞ女なりといふを喜びてもの珍しさに集ふ成けり　されバこそことなる事なき反古紙作り出ても今清少よむらさきよとはやし立る　誠は心なしのいかなる底意ありてともしらず我れをたゞ女子と斗見るよりのすさび　（「ミつの上日記」明治29・５・２）

・こぞの秋かり初に物しつるにごり江のうわさ世にかしましうもてはやされてかつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ　十三夜もめづらしげにいひさわぎて女流中ならぶ物なしなどあやしき月旦の聞えわたれるこゝろぐるしくも有かな　しば〳〵　おもふて骨さむく肉ふるはるゝ夜半もありけり　かゝるをこそハうき世のさまといふべかりけれ　かく人々のいひさわぐ何かはまことのほめこと葉なるべき　たゞ女義太夫に三味の音色ハえも聞わけで心をくるはするやうのはかなき人々が一時のすさびに取はやす成らし　（「水のうへ」明治29・１）

・ミたりける夢の中にハおもふ事こゝろのまゝにいひもしつ　おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしをさめぬれば又もやうつせミのわれにかへりていふまじき事かたりがたき次第などさま〳〵ぞ有る

しばし文机に頬づえつきておもへば誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとてそはなすべき事かは

（中略）

かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく我れをしるもの空しきをおもへばあやしう一人この世に生れし心地ぞする　我れは女なり　いかにおもへることありともそハ世に行ふべき事かあらぬか　（「ミつの上」明治29・２・20）

「めさまし草」（明治29・５）において森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨が一葉の『たけくらべ』を絶賛し、それを直接の契機として、世間には一葉ブームとでも言うべき現象が起こる。上記の日記からは、一葉がこのような世間の評判、人々の関心の核心に、自らの「女」という性があることを明確にとらえていたことが知られる。一葉は女性作家としての自らにそそがれる視線と、吉原で身を売る女性たち、すなわち性的欲望の対象としての娼婦たちにそそがれる視線とが、本質的には同じものであることを厳しく認識していた。そしてこの認識こそが、樋口一葉を同時代の女性作家から突出した存在としたのである。

さて、「閨秀小説」号に掲載された一葉の写真は、彼女の周辺にも物議をかもした。次にその一例をあげる。

・此度博文館にて閨秀小説を文芸倶楽部号外として出版いたししにつき巻頭に家々の真影を掲げしに就てハ一々新に撮影を求むるか左なくば陳期を貰ひて既に彫刻にかゝりしよし余人ハ知らず大姉に於てハ花圃女史共々断然拒否し遊し御事とかねて拝察いたし居候ひしに図らざりき大姉のも亦掲げありしよし実に驚入し斯る事ハ小説家としてまた或る意味に於てハ社会の警醒家として識見に欠くる処ハ無之しや売らんとする博文館ハ商売人根性として或ハ恕すべきも之を許せし小説家ハ精神上